

春昼後刻

泉鏡花

青空文庫

二十四

この雨は間もなく霽れて、庭も山も青き天鷲絨に蝶花の刺
 繡ある霞を落した。何んの余波やら、庵にも、座にも、袖にも、
 菜種の薫が染みたのである。

出家は、さて日が出口から、裏山のその蛇の矢倉を案内しよう、
 と老実やかに勧めたけれども、この際、観音の御堂の背後へ通
 り越す心持はしなかつたので、挨拶も後日を期して、散策
 子は、やがて庵を辞した。

差当り、出家の物語について、何んの思慮もなく、批評も出

来ず、感想も陳べられなかつたので、言われた事、話されただけを、不のこらず残鵜呑みにして、天窓あたまから詰つめこ込んで、胸が膨ふくれるままでにひとしずかなつたから、独り静あるに歩行きながら、消化こなして胃の腑ふに落ちつけようと思つたから。

対手あいても出家だから仔細しさいはあるまい、（さようなら）が些ちと唐だしぬ突けであつたかも知れぬ。

ところで、石段を背後うしろにして、行手ゆくてへ例の二階を置いて、吻ほっと息をすると……、

「転うたたね寐ねに……」

と先まず口の裏うちでいつて見て、小首を傾けた。杖ステッキが邪魔なので腕かいなの処ところへ揺ゆり上げて、引包ひきつつんだその袖そでともに腕組をした。菜種の

花道、幕の外の引込みには引立たない野郎姿。雨上りで照々^かと日が射すのに、薄く一面にねんばりした足許、這^{あしもと}つて転ばねば可^よい。

「恋しき人を見てしより……夢てふものは、」

とちよいと顔を上げて見ると、左の岨^{がけ}から椎^{しい}の樹が横に出てい
る——遠くから視^{なが}めると、これが石段の根を仕切る緑なので、
—庵室^{あんじつ}はもう右手^{めて}の背後^{うしろ}になつた。

見たばかりで、すぐにまた、

「夢と言え、これ、自分も何んだか夢を見ているようだ。やが
て目が覚^さめて、ああ、転^{うたた}寐^{たね}だつたと思えば夢だが、このまま、
覚めなければ夢ではなからう。何時^{いつ}か聞いた事がある、狂人^{きちがい}と

真人間まにんげんは、唯時間ただの長短だけのもので、風が立つと時々波が荒れるように、誰でもちよいちよいは狂気きちがいだけれど、直ぐ、風なぎになつて、のたりのたりかなで済む。もしそれが静まらないと、浮世の波に乗つかつてゐる我々、ふらふらと脳が揺れる、木き静まらんと欲すれども風やまずと来た日にや、船に酔えう、その浮世の波に浮んだ船に酔うのが、たちどころに狂人きちがいなんだと。
危険けんけん々々々。

ト来た日にや夢もまた同おんなじ一だろう。目が覚めるから、夢だけれど、いつまでも覚めなけりや、夢じやあるまい。

夢になら恋人に逢えると極きまれば、こりや一層夢いつそにしまつて、世間で、誰某たれそれは？ と尋ねた時、はい、とか何とか言つて、

蝶 ちようちよう 々 二つで、ひらひらなんぞは悟つたものだ。

庵室 あんじつ の客人なんぎ、今聞いたようだと、夢てふものを頼 たの み切

りにしたのかな。」

と考えが道草 みちくさ の蝶に誘 さそ われて、ふわふわと玉 たま の緒 お が菜の花ぞ
いに伸びた処 ところ を、風もないのに、颯 さつ とばかり、横合 よこあい から雪 かいな の腕 うで、
緋 ひ の襟 えり で、つと爪 つま 尖 さき を反 ひらり して足を踏伸 ふみの ばした姿が、真黒 まつくろ な
馬に乗って、蒼空 あおぞら を翻然 ひらり と飛び、帽子 ひさし の廂 かす を掠 かす めるばかり、大
波 なみ を乗って、一跨 ひとまた ぎに紅 くれな の虹 おど を躍 おど り越えたものがある。

はたと、これに空想 ゆくて の前途 さえぎ を遮 こころづ られて、驚 おどろ いて心付くと、赤 や
棟蛇 まかがし のあとを過ぎて、機 はた を織 おん る婦人 な の小家 こいえ も通り越 こ していたの
であつた。

音はと思うに、きりはたりする声は聞えず、山越えた停車場ステーションの笛太鼓ふえたいこ、大きな時計のセコンドの如く、胸に響いてトトンと鳴る。

筋向すじむかいの垣根かきねの際きわに、こなたを待ち受けたものらしい、鋏くわを杖ついて立つて、莞爾にこついて、のっそりと親仁おやしあり。

「はあ、もし今帰らせえますかね。」

「や、先刻は。」

二十五

その莞爾にこにこ々々の顔のまま、鋏くわを離した手を揉もんで、

「何んともハイ御しんせつに言わっせえて下せえやして、お庇かげさ様まで、私わし、えれえ手柄てがらして礼を聞いたでござりやすよ。」

「別に迷惑にもならなかつたかい。」

と悠々ゆうゆうとしていった時、少なからず風采ふうさいが立上たちあがつて見えた。勿論もちろん、相手は件の親仁あいてくだんだけれど。

「迷惑どころ処ではござりましねえ、かさねがさね礼を言われて、私大わらくありがたがられました。」

「じゃ、むだにならなかつたかい、お前さんが始末をしたんだね。」

「竹ン尖さきで圧おさえつけてハイ、山の根っこ藪やぶの中へ棄てたでござえます。女中たちが殺すなど言うけえ。」

「その方が心持こころもちが可い、命を取ったんだと、そんなにせずとも、わたし私が訴人そにんしたんだから、怨みうらがあれば、こつちへ取付とつくかも分らずさ。」

「はははは、旦那様の前だが、やっぱり好きではねえでがすな。奥にいた女中は、蛇がと聞いただけでアレソレ打騒ぶつさわいで戸障としよう子じへ当あたつただよ。

わし私先ず庭口にわぐちから入つて、其処そこさ縁側えんがわで案内あんねえして、それから台所口だいどころぐちに行つてあつちこつち探索たんそくのした処ところ、何が、お前様御ご勘考かんこうさ違わねえ、湯殿ゆどのに西の隅すみに、べいらべいら舌さあ吐はいとるだ。

思おもつたより大うでっこがした。

畜生め。われさ行ぎようずい水みづするだら蛙飛込むかえるびこ古池ふるいけというへ行け
 さ。化粧部屋のぞ覗きおつて白粉おしろいつけてどうしるだい。白鷺しらさぎにで
 も押惚おっぼれたかと、ぐいとなやして動かさねえ。どうしべいな、長
 アくして思案しあんのしていりや、遠くから足の尖さきを爪つまだ立て、お殺し
 でない、打棄うちちやつておくれ、御新姐ごしんぞは病氣びやうきのせいで物事ものごと氣にし
 てなんねえから、と女中たちが口を揃そろえていうもんだでね、芸げも
 ねえ、殺せつしよう生せいするにや当らねえでがすから、藪やぶ畳たたみへ潜もぐらし
 て退のけました。

御新姐ごしんぞは、気分が勝すぐれねえとつて、二階に寝てござらしけえ。
 今しがた小雨こさめが降つて、お天氣が上ると、お前様めえさま、雨よりは
 大きい紅べにいろ色の露がぽったりぽったりする、あの桃の木の下の許ところ

さ、背戸口せどぐちから御新姐ごしんぞが、紫色の蝙蝠傘こうもりがささして出てござつて、
 (爺じいやさん、今ほどはありがとう。その厭いやなものいた事を、通りがかりに知らして下すつたお方は、巖殿いわどの方へおいでなすつたというが、まだお帰りになつた様子はないかい。) ツて聞かした。

(どうだかね、私わし、内方うちかたへ参つたは些ちいとの間まだし、雨に駈出かけだしても来さつしやらねえもんだで、まだ帰らつしやらねえでござえましょう。

それとも身軽でハイずんずん行かつせえたもんだで、山越なごえしに名越なごえの方さ出ださつしやつたかも知れましねえ、) 言うたらばの。
 (お見上げ申したら、よくお礼を申して下さいよ。) ツてよ。

その溝さ飛越^{とびこ}して、その路^{みち}を、

垣^{かき}の外のこなたと同^{おんなじ}一通^{とお}筋^{すじ}。

「ハイぶうらりぶうらり、谷戸^{やと}の方へ、行かしつけえ。」

と言いかけて身体^{からだ}ごと、この巖殿^{いわど}から樞^{かしわばら}原へ出口の方へ振

向いた。身の挙動^{こなし}が仰^{ぎようさん}山で、さも用ありげな素振^{そぶり}だったので、

散策子もおなじくそなたを。……帰途^{かえるさ}の渠^{かれ}にはあたかも前途^{ゆくて}に

当る。

「それ見えるでがさ。の、彼処^{あそこ}さ土手の上にござらっしゃる。」

錦^{にしき}の帯を解いた様な、媚めかしい草の上、雨のあとの薄^{うす}霞^{がすみ}、

山の裾^{すそ}に鬢^{たなび}鬢^{うち}く中に一^{いち}張^{ちよう}の紫^{むらさき}大^{おほ}きさ月^げ輪^{りん}の如く、はた莖^{すみれ}の

花束に似たるあり。紫羅傘^{しらさん}と書いていちのはちの花、字の通りだと、

それ美人の持物。

散策子は一ひとめ目見て、早く既にその霞かすみの端はしの、ひたひたと来て膚はだに絡まとうのを覚えた。

彼処かしことこなたと、言い知らぬ、春の景色の繋がる中へ、蕨わらびのよ
うな親仁おやじの手、無骨ぶこつな指ゆびで指さして、

「彼処あそこさ、それ、傘かさの陰やすに憩やすんでござる。はははは、礼を聞かつ
せえ、待つてゐるだに。」

二十六

横に落した紫の傘には、あの紫苑しおんに来る、黄こがねいろ金色の昆虫つばさの翼

の如き、煌々きらきらした日の光が射込んで、草に輝くばかりに見える。

その蔭かげから、しなやかな裳もすそが、土手の翠みどりを左右へ残して、線も

なしに、よろけ縞じまのお召縮緬めしちりめんで、嬌態しなよく仕切ったが、油のよ

うにとろりとした、雨のあとの路みちとの間、あるかなしに、細い棲つ

先まさきが柔やわらかくしつとりと、内端うちわに搔かい込んだ足袋たびで留とまつて、其処そこ

から襦袢じゆばんの友染ゆうぜんが、豊かに膝まで捌さばかれた。雪駄せったは一ツ土ひとに

脱いで、片足はしなやかに、草に曲まがっているのである。

前を通ろうとして、我にもあらず立淀たちよどんだ。散策子げしゆは、下

衆うばら儕かけものと賭物うばらして、鬼が出る宇治橋うじばしの夕暮ただいを、唯一騎いき、東へ打う

たする思おもがした。

かく近づいた蹠音あしおとは、件の紫の傘くだんを小楯こだてに、土手へかけて悠ゆ

うぜんおぼろげ
然と臙に投げた、艶にして凄^{すご}い緋の袴に、小波^{さざなみ}寄^{かすか}する微な響
きさえ与えなかつたにもかかわらず、こなたは一つ胴震^{どうふる}いをし
て、立直^{たちなお}つて、我知らず肩を聳^{そび}やかすと、杖^{ステッキ}をぐいと振つて、
九字^{くじ}を切りかけて、束々^{つかつか}と通つた。

路は、あわれ、鬼の脱いだその沓^{くつ}を跨^{また}がねばならぬほど狭いの
で、心から、一方は海の方^{かた}へ、一方は櫃^{かしわばら}原の山里へ、一方は
来^こし方^{かた}の巖殿^{いわど}になる、久能谷^{くのや}のこの出口は、あたかも、ものの撞^し
ゆもく^{なり}木の形。前は一面の麦^{むぎ}畠^{ばたけ}。

正面に、青麦^{あおむぎ}に対した時、散策子^{さんさくし}の面^{おもて}はあたかも酔えるが如
きものであつた。

南無^{なむ}三宝^{さんぼう}声^{こゑ}がかかつた。それ、言わぬことではない。

「……………」

一散いっさんに遁にげもならず、立停たちどまった渠かれは、馬の尾に油を塗つて

置いて、驚わしづか掴たなそこすべみの掌を迂り抜くちおしけなんだを口惜くちおしく思つたろう。

わたし
「私。」

と振返つて、

「ですかい、」と言いつつ一ひとめ目見たのは、頭禿かしがむろに齒豁はあらわなるもので

はなく、日の光射さす紫のかげを籠こめた倂おもかけは、几帳きちように宿る月の影、

雲びんずらみざしの鬢たんか、簪ふようの星、芙蓉ふようの眦まなじり、柳の腰を草すがに縋すがつて、鼓た

草んぽほの花に浮さまべる状、虚空にかかつた装よそおいである。

しらお 白魚しらおのような指が、ちよいと、紫紺しこんの半襟はんえりを引き合わせると、

美しい瞳ひとみが動いて、

「失礼を……」

ただっこり
と唯莞爾する。

「はあ、」と言ったきり、腰のまわり、遁にげ路みちを見て置くのである。

「貴あなた下お呼び留とめ申しまして、」

とふつくりとした胸を上げると、やや凭もたれかかつて土手に寝るようにしていた姿を前へ。

「はあ、何なに、」

まつしように
真正直な顔をして、

「私ですか、」と空とぼける。

「貴あなた下のようなお姿だ、と聞きましたでございます。先せん刻こくは、真まこと

に御心配下さいまして、」

徐^{やお}ら、雪のような白足袋^{しろたび}で、脱ぎ棄てた雪駄^{せった}を引寄せ^{ひきよ}せた時、友^ゆ

染^{うぜん}は一層はらはらと、模様の花が俤^{おもかげ}に立って、ぱツと留^{とめ}南奇^{ななき}の

薫^{かおり}がする。

美^{たおやめ}女^{たちな}は立直^{たちなお}つて、

「お蔭^{かげ}様^{さま}で災難^{さいなん}を、」

と襟首^{えりくび}を見せてつむりを下げた。

爾^{そのとき}時^ひ独^{ひとり}武者^{むしや}、杖^{すてき}をわきばさみ、兜^{かぶと}を脱いで、

「ええ、何んですかな、」と曖昧^{あいまい}。

美^{たおやめ}女^なは親しげに笑いかけて、

「ほほ、私^{わたし}はもう災難と申します。災難ですわ、貴^{あなた}下^げ。あれが座

敷へでも入りますか、知らないでいて御覧なさいまし、当分家うちを
 明あけ渡わたして、何処どこかへ参らなければなりませんの。真個ほんとうにそう
 なりましたら、どうしましょう。お庇様かげさまで助たすりましてございま
 すよ。ありがとう存じます。」

「それにしても、私と極きめたのは、」
 と思うことが思わず口へ出た。

これは些ちと調子はずれたので、聞き返すように、
 「ええ、」

二十七

「先刻さつぎの、あの青大将あおだいしやうの事なんでしょう。それにしても、よ

く私だというのが分りましたね、驚きました。」

と棄鞭すてむちの遁構にげがまえで、駒うまの頭かしらを立直たてなおすと、なお打笑うちえみ、

「そりや知れますわ。こんな田舎いなかですもの。そして御覧の通り、

人通りのない処ところじゃありませんか。

貴下あなたのような方かたの出入ではいりは、今朝けさツからお一人しかありません

もの。丁ちゃんと存じておりますよ。」

「では、あの爺じいさんにお聞きなすつて、」

「否いいえ、私ども石垣の前をお通りがかりの時、二階から拝おがみしました

。」

「じゃあ、私が青大将を見た時に、」

「貴下のお姿が楯におなり下さいましたから、爾時も、厭なも

のを見ないで済みました。」

と少し打傾いて懐しそう。

「ですが、貴女、」とうっかりいう、

「はい？」

と促がすように言いかけられて、ハタと行詰ったらしく、杖

をコツコツと瞬一ツ、唇を引緊めた。

追っかけて、

「何んでございますか、聞かして頂戴。」

と婉然とする。

慌て気味に狼狽つきながら、

「貴女は、あなた 貴女は気分が悪くって寝ていらつしやるんだ、という

じやありませんか。」

「あら、こんなに甲羅こうらを干ほしておりますものを。」

「へい、」と、綱つなは目めを睜みはつて、ああ、我ながらまずいことを言

つた顔が色んしよく。

美女たおやめはその顔さしを差のぞ覗ふぜいく風情ひとみして、瞳ひとみを斜つめに衝つと流ながしながら、

華奢きゃしやな掌たなを軽そく頬こに当あたると、紅くれながひらりと搦からむ、腕かいなの雪

を払はう音おと、さらさらと衣きぬ摺すれして、

「真個まは、寝まつていましたの……」

「何なんんですッて、」

と苦にが笑わらい。

「でも爾時そのときは寝ていやしませんの。貴下あなた起きていたんですよ。

あら、」

とやや調子ちようし高だかに、

「何を言つてゐるんだか分らないわねえ。」

馴なれなれ々なれなれしくいうと、急に胸を反そらして、すツきりとした耳許みみもと

を見せながら、顔を反そむ向むけて俯向うつむいたが、そのまま身体からだの平均を

保つように、片足をうしろへ引いて、立直たちなおつて、

「否いいえ、寝ていたんじゃないやなかつたんですけども、貴下あなたのお姿を拝み

ますと、急に心持こころもちが悪くなつて、それから寝たんです。」

「これは酷ひどい、酷ひどいよ、貴女あなたは。」

棄すて身みに衝つと寄り進んで、

「じゃ青大将の方が増ましだったんだ。だのに、わざわざ呼よ留びめて、災難のを免のがれたとまで事を誇こ大だいにして、礼なんぞおつしやつて、元来、私は余計なお世話だと思つて、御婦人ばかりの御住居おすまいだと聞いたにつけても、いよいよ極きまりが悪くつて、此処ここだつて、貴女あなた、こそこそ遁にげて通ろうとしたんじやありませんか。それを大袈裟おおげさに礼を言つて、極きまりを悪がらせた上に、姿とは何事です。幽霊ゆうれいじやあるまいし、心持こころもちを悪くする姿というがありますか。図体ずうたいとか、状さまとかいうものですよ。その私の図体を見て、心持が悪くなつたは些ちと烈はげしい。それがために寝たは、残酷じやありませんか。

要いらんおせつかいを申上げたのが、見苦しかったらそうおつし

やい。このお関所をあやまつて通して頂く——勧進帳でも読

みましようか。それでいけなけりや仕方がない。元の巖殿へ引

返して、山越で出奔する分の事です。」

と逆寄せの決心で、そう言つたのをキツカケに、どかと土手の

草へ腰をかけたつもりところの処、負けまい氣の、魔ものの顔を見詰め

ていたので、横ざまに落しつけるはずの腰が据らず、床几を這

つて、ずるりと大地へ。

「あら、お危い。」

というが早いまばゆか、眩いばかり目の前へ、霞を抜けた極彩色。

さそくに友染ゆうぜんの膝を乱して、繕つくろいもなくはらりと折敷おりしき、片手

が踏み抜いた下駄げた一ツ前壺まえつぼを押して寄越すと、扶たすけ起すつもり

であろう、片手が薄色の手巾ごと、ひらめいて芬と薰つて、優しく男の背にかかった。

二十八

なむかんぜおんだいぼさつ
南無観世音大菩薩……助けさせたまえと、散策子は心の裏、
じんぞなえ　みがまえ
陣備も身構もこれにて粉になる。

「お足袋が泥だらけになりました、直き其処でござんすから、ちよいとおいすがせ申しましょう。お脱ぎ遊ばせな。」

と指をかけようとする爪尖を、慌しく引込ませるを拍子に、
たい　たい
体を引いて、今度は大丈夫に、背中を土手へ寝るばかり、ばた

りと腰を懸ける。^{あたたか}暖い草が、ちりげもとで赫^{かつ}とほてつて、汗びつしより、まっかな顔をしてかつ目をきよろつかせながら、

「構わんです、構わんです、こんな足袋^{たび}なんぞ。」

ヤレまた落語^{ぜんざ}の前座^{ぜんざ}が言いそうなことを、とヒヤリとして、漸^{やつ}と瞳^{ひとみ}を定めて見ると、美女^{たおやめ}は刎飛^{はねと}んだ杖^{ステッキ}を拾^{ひろ}つて、しなやかに

両手でついて、悠々^{ゆうゆう}と立っている。

羽織^{はおり}なしの引^ひかけ帯^{おび}、ゆるやかな袷^{あわせ}の着^きこなしが、いまの身じ

ろぎで、片前^{かたまえ}下^{さが}りに友染^{ゆうぜん}の紅^く匂^{にお}いこぼれて、水色^{みずいろ}縮^{ちりめん}緬^{めん}の

扱^{しご}帯^{おび}の端^{はし}、ややずり下^{さが}つた風情^{ふぜい}さえ、杖^{ステッキ}には似合^{にあ}わないだけ、あ

たかも人質^{もに}に取^とられた形^{かたち}——可哀^{かわい}や、お主^{しゅう}の身^みがわりに、恋^{こひ}の重^{おも}

荷^{もに}でへし折^をれよう。

「真個ほんとに済みませんでした。」

またぞろ先せんを越して、

「私わたし、どうしたら可いいでしょう。」

と思案なずる目を半ば閉じて、屈託くつたくらしく、盲目めくらが歎息たんそくをするように、ものあわれな装よそおいして、

「うっかり飛んだ事を申上げて、私、そんなつもりで言つたんじやありませんわ。」

貴下あなたのお姿を見て、それから心持こころもちが悪くなりましたって、

言通ことばどおりの事が、もし真個まっこうなら、どうして口へ出して言えます

もんですか。貴下あなたのお姿を見て、それから心持こころもちが悪く……」

再び口くちの裏で繰返して見て、

「おほほ、まあ、大概^{たいがい}お察し遊ばして下さいましなね。」

と樂にさし寄つて、袖^{そで}を土手へ敷いて凭^{もた}れるようにして並べた。春の草は、その肩あたりを翠^{みどり}に仕切つて、二人の裾^{すそ}は、足許^{あしもと}なる麦畠に臨んだのである。

「そういうつもりで申上げたんでござんせんことは、よく分つてますじやありませんか。」

「はい、」

「ね、貴下^{あなた}、」

「はい、」

と無意味に合点^{がってん}して頷^{うなず}くと、まだ心が済まぬらしく、

「言^{ことば}とがめをなすつてさ、真個^{ほんと}にお人が悪いよ。」

と異^{おつ}に搦^{から}む。

聊^{いささ}か弁^{べん}ぜざるべからず、と横に見向いて、

「人の悪いのは貴女^{あなた}でしょう。私^{わたし}は何も言^{こと}とがめなんぞした覚えはない。心持が悪いとおっしゃるからおっしゃる通りに伺^{うかが}いました。」

「そして、腹をお立てなすつたんですもの。」

「否^{いや}、恐縮^{おそく}をしたまです。」

「そこは貴下^{あなた}、お察し遊ばして下さる処^{ところ}じゃありませんか。

ことばあや

言^{こと}の綾もございますわ。朝顔の葉を御覧なさいまし、表はあんなに薄っぺらなもんですが、裏はふつくりしておりますもの……

裏を聞いて下さいよ。」

「裏だと……お待ちなさいよ。」

ええ、といきつぎに目を瞑ねむつて、仰向あおもむいて一呼吸ひといきついて、

「心こころもち持もが悪くなつた反対さかひなんだから、私の姿を見ると、それ

から心持よが善よくなつた——事になる——可いい加減かげんになさい、馬鹿になすつて、」

と極きめつける。但ただし笑いながら。

清すずしい目で屹きつと見て、

「むずかしいのね？ どう言えばこうおつしやつて、貴下あなた、弱いものをおいじめ遊ばすもんじやないわ。私わたしは煩わづらっているんじやありませんか。」

草に手をついて膝をずらし、

「お聞きなさいましよ、まあ、」

と恍惚うつとりしたように笑えみを含む口許くちもとは、鉄漿かねをつけていはしま

いかと思われるほど、婀娜あだめいたものであつた。

「まあ、私に、恋なつかしい方かたがあるとしましようね。可ようござんすか……」

二十九

「恋なつかしい方かたがあつて、そしてどうしても逢あえないで、夜も寐ねられないほどに思い詰めて、心も乱れれば気も狂いそうになつておりますものが、せめて肖にたお方でもと思うのに、この頃はこ

うやって此処ここらには東京からおいでなすつたらしいのも見えませ
 ところ
 ん処へ、何年ぶりか、幾月いくつき越か、フトそうらしい、肖にた姿をお
 見受け申したとしましたら、貴下あなた、」

と手許てもとに丈たけのびた影のある、土筆つくしの根を摘つみ試こころみ、

「爾時そのときは……、そして何んですか、切せつなくつて、あとで臥ふせった

と申しますのに、爾時そのときは、どんな心こころもち持もてと言いつて可いいので

ございましょうね。

やつぱり、あの、厭いやな心持になつて、というほかはないではあ

りませんか。それを申したんでございますよ。」

いちごん
 一言もなく……しばらくして、

「じゃ、そういう方かたがおあんなさるんですね、」と僅わずに一方いっぽうへ

切^{きり}抜^ぬけようとした。

「御存じの癖^{くせ}に。」

と、伏^{ふく}兵^{へい}大いに起る。

「ええ、」

「御存じの癖に。」

「今お目にかかったばかり、お名も何も存じませんのに、どうしてそんな事が分ります。」

うたゝ寐^ねに恋しき人を見てしより、その、みを、という名も知らぬではなかったけれども、夢のいわれも聞きたさに。

「それでも、私が気疾^{きやみ}をしております事を御存じのようでしたわ。

先刻^{さつき}、」

「それは、何、あの畑^{はたう}打ちの爺^{じい}さんが、蛇をつかまえに行つた時に、貴女^{あなた}はお二階に、と言つて、ちよつと御様子^もを漏らしただけです。それも唯^{ただ}御気分が悪いとだけ。

私の形を見て、お心持が悪くなつたなんぞつて事は、些^{ちつ}とも話しませんから、知ろう道理^{どうり}はないのです。但^{ただ}礼をおっしゃるかも知れんというから、其^{そいつ}奴は困つたと思ひましたけれども、此^{ここ}処を通らないじや歸られませんか。こうと分つたら穴へでも入るんだつて。お目にかかるのじやなかつたんです。しかし私が知らないで、二階から御覧なすつただけは、そりや仕方がない。
。」

「まだ、あんな事をおっしゃるよ。そうお疑いなさるんなら申し

ましょう。あなた貴下、このまあ麗かな、樹も、草も、血があれば湧く
 んでしよう。朱しゆの色した日の光にほかほかと、土も人ひと膚はだのよう
 に暖あたうござんす。こ竹があつても暗くなく、花に陰もありません。
 燃えるようにちらちら咲いて、水へ散つても朱しゆ塗ぬりの杯さかずきになつて
 ゆるゆる流れましょう。海も真ま蒼つさおな酒のようで、空は、「
 と白たない掌そこを、膝あおむに仰うちあ向おけて打うちあ仰おぎ、

「緑の油のよう。とろとろと、曇くもりもないのに淀よどんでいて、夢を見
 ないかと勧めるようですわ。山の形も柔やわらかな天びろうど鷺う絨じの、ふつくり
 した括くくり 枕まくらに似ています。そちこち陽かげ炎ろうや、糸いと遊ゆうがたきし
 めた濃いたきもののように靡なびくでしよう。雲ひばり雀は鳴こうとしてい
 るんでしよう。うぐいす鶯うぐいすが、遠くの方で、低とこい処ころで、こちらにも里があ

る、楽しいよ、と鳴いています。何不足のない、申分もうしぶんのない、目を瞑ねむれば直ぐにうとうとと夢を見ますような、この春の日中ひなかなんでございますがね、貴下あなた、これをどうお考えなさいますえ。」

「どうと言つて、」

ことば
と言に連れられた春のその日中ひなかから、瞳ひとみを美女たおやめの姿にかえした。

「貴下あなたは、どんなお心持がなさいますえ、」

「……………」

「お楽たのしみですか。」

「はあ、」

「お嬉うれしゅうございますか。」

「はあ、」

「お賑にぎやかでございますか。」

「貴女あなたは？」

「私は心持が悪いんでございます、丁ちようど貴下あなたのお姿を拝みました
時のように、」

と言いかけて吻ほと小さなといき、人質のかの杖ステッキを、斜めに両手
で膝へ取った。情なさけの海に棹さおさす姿。思わず腕組をして熟じっと見る。

三十

「この春の日の日中ひなかの心持を申しますのは、夢をお話しよう

で、何んとも口へ出しては言えませんのね。どうでしょう、このしんとして寂さびしいことは。やつぱり、夢に賑にぎやかな処ところを見るようではござんすまいか。二歳ふたつか三歳みつぐらいの時に、乳母うばの背中から見ました、祭礼おまつりの町のようにも思われます。

何な為ぜか、秋の暮より今、この方ほうが心細いんですもの。それでいて汗が出ます、汗じゃなくつてこう、あの、暖かさで、心を絞しぼり出されるようですわ。苦しくもなく、切せつなくもなく、血を絞しぼられるようですわ。柔やわらかな木の葉の尖さきで、骨を抜かれますようではございませんか。こんな時には、肌はだが蕩とろけるのだって言いますが、私は何んだか、水になつて、その溶けるのが消えて行きゆきそうで涙が出ます、涙だつて、悲しいんじゃないやありません、そうかと言つて

嬉しい^{うれ}いんでもありません。

あの貴下^{あなた}、叱^{しか}られて出る涙と慰められて出る涙とござんすのね。

この春の日に出ますのは、その慰められて泣くんです。やつぱり悲しいんでしょうかねえ。おなじ寂^{さび}しさでも、秋の暮のは自然が寂しいので、春の日の寂しいのは、人が寂しいではありませんか。

ああ遣^やつて、田圃^{たんぼ}にちらほら見えます人も、秋のだと、しつかりして、てんでんが景色の寂しさに負けないように、張^{はり}合^{あい}を持つているんでしょう。見た処^{ところ}でも、しよんぼりした脚^{あし}にも氣が入っているようですけれど、今しがたは、すっかり魂^{たましい}を抜き取られて、ふわふわ浮き上って、あのまま、鳥か、蝶^{ちようちよう}々々にでもなり

そうですね。心細いようですね。

暖い、優しい、柔かな、すなおな風にさそわれて、鼓草の花

が、ふつと、綿になつて消えるように魂がなりそうなんですもの。

極楽というものが、アノ確に目に見えて、そして死んで行くと同

一 心 持 なまじこころもち なんでしょう。

楽しいと知りつつも、情ない、心細い、頼りのない、悲しい事

なんじやありませんか。

そして涙が出ますのは、悲しくつて泣くんでしょうかと、甘えて泣くんでしょうかねえ。

私はずたずたに切られるようで、胸を搔きむしられるようで、そしてそれが痛くも痒くもなく、日当りへ桃の花が、はらはらと

こぼれるようで、長閑で、麗で、美しくつて、それでいて寂しく
 つて、雲のない空が頼りのないようで、緑の野が砂原すなはらのようで、
 前生ぜんせいの事のように、目の前の事のように、心の内が言いたくつて、
 言われなくつて、焦じれつたくつて、口惜くやしくつて、いらいらして、じ
 りじりして、そのくせぼつとして、うつとり地の底ひきこへ引込まれる
 と申しますより、空へ抱だき上げられる塩梅あんばいの、何んとも言えな
 い心持こころもちがして、それで寝ましたんですが、貴下あなた、
 小雨こさめが晴れて日の照るよう、忽ち麗たちまうらなおももちして、
 「こう申してもやっぱりお気に障さわりますか。貴下あなたのお姿を見て、
 心持が悪くなつたと言いましたのを、まだ許しちや下さいません
 か、おや、貴下あなたどうなさいましたの。」

身動ぎみじろもせず聞き澄すんだ散策子の茫然ぼんやりとした目の前へ、紅べにお
 白粉しろいの烈ながれまばゆしい流が眩うずまい日の光で渦うずまいて、くるくると廻まわっていた。

「何んだか、私も変な心持になりました、ああ、」
 と掌てのひらで目を払はらって、

「で、そこでお休みになつて、」

「はあ、」

「夢でも御覧になりましたか。」

思わず口へ出したが、言い直した、余り唐突だしぬけと心付こころづいて、

「そういうお心こころもち持もてうたた寐ねでもしましたら、どんな夢を見

るでしょうな。」

「やっぱり、貴下あなたのお姿を見ますわ。」

「ええ、」

「此処ここにこうやっておりますような。ほほほほ。」

と言いい知らずあでやかなものである。

「いや、串じやうだん戯あなはよして、その貴女あなた、恋こしい、慕したわしい、そし

てどうしても、もう逢あえない、とお言いいなすつた、その方かたの事を

御覧ごらんなさるでしょうね。」

「その貴下あなたに肖にた、」

「否いいえさ、」

ここで顔を見合あわせて、二人とも撈むしっていた草を同時に棄すてた。

「なるほど。寂しんとしたもんですね、どうでしょう、この閑しずかさは：

…」

いただき
頂の松の中では、頻しきりに目白めじろが轉さえずるのである。

三十一

「またこの櫃かしわばら 原なげものというんですか、山の裾すそがすすく出張でばつて、
大きな怪物なわしろだの土地の神が海の方へ向つて、天地に開いた口の、
奥歯むぎばたけへ苗代田ひつくわ 麦ひつくわ 畠などを、引銜ひつくわえた形に見えます。谷戸やと
の方は、こう見た処ところ、何んの影もなく、春の日が行渡ゆきわたつて、些ち
と曇くもりがあればそれが霞かすみのような、長閑な景色でいながら、何んだ
か厭いやな心こころもち持もの処ところですね。」
美たおやめ女は身を震わして、何故なぜか嬉うれしそうに、

「ああ、貴下あなたもその（厭いやな心持）をおつしやいましたよ。じゃ、もう私もそのお話をいたしましても差支さしつかえございませんのね。」

「可ようございます。ははははは。」

トちよつと更あらたまつた容子ようすをして、うしろ見られる趣おもむきで、その二階家かいやの前みちから路みちが一畝ひとつねり、矮ひくい藁屋わらやの、屋根にも葉にも一面なわしろだの、椿つばきの花の紅くれないの中へ入すそつて、菜畠なばたけへ纔わずかに蹠あらわれ、苗代田なわしろだでまた絶えて、遙かに山の裾すその翠みどりに添つうて、濁あつた灰汁あくの色をなして、ゆつたりと向うへ通じて、左右から突出つきでた山でとまる。樫かし原わばらの奥深く、蒸むし上あるようかに低く霞かすみの立つあたり、背中合せが停車ステイシ場ヨシで、その腹ふへ笛太鼓ふえたいこの、異様に響ねく音を籠こめた。其処そこへ、遙かに瞳ひとみを通かわせ、しばらく茫然とした風情ふぜいであつた。

「そうですねえ、はじめは、まあ、心持こころもち、あの辺からだろうと思うんですわ、声が聞えて来ましたのは、」

「何んの声です？」

「はあ、私が臥ふせりまして、枕に髪をこすりつけて、悶もだえて、あせつて、焦しれて、つくづく口惜くやしくつて、情なさけなくつて、身がしびれるような、骨が溶けるような、心持でいた時でした。先刻さつきの、あの雨の音、さあつと他愛たわいなく軒のきへかかつて通りましたのが、丁ど彼あ処すこあたりから降り出して来たように、寝ていて思われたのでございます。

あの停車場ステイションの囃子はやしの音に、何時いつか気を取られていて、それだからでしょう。今でも停車場ステイションの人ごみの上へだけは、細こまい雨が

かかっているように思われますもの。まだ何処にか雨氣が残つて
 おりますなら、向うの霞かすみの中でしようと思ひますよ。

と、その細い、幽かすかな、空を通るかと思う雨の中に、図太い、底そこ
 ちぢから

力のある、そして、さびのついた塩辛しおからごえ声を、腹の底から押
 出して、

(ええ、ええ、ええ、伺うかがいます。お話はお馴染なじみの東京世渡草、

あきんど 商 人の仮声物真似。先ず神田辺かんだへんの事でござりまして、ええ、

たいけ 大家の店前みせさきにござります。夜よのしらしら明けに、小僧さんが門か
 どぐち

口を掃はいておりますと、納豆なっとう、納豆――)

と申して、情なさけない調子になつて、

(ええ、お御酒みきを頂きまして声が続きません、助けて遣やつておく

んなさい。）

と厭いやな声が、流れ星のように、尾を曳ひいて響くんでございますの。

私は何んですか、悚然ぞっとして寢床に足を縮めました。しばらくして、またその（ええ、ええ、）という変な声が聞えるんです。今度は些ちっと近くなつて。

それから段々あの櫃かしわばら原うちの家を向い合いに、飛び飛びに、千ち鳥どりにかけて一軒一軒、何処どこでもおなじことを同一おなじところまで言つて、お錢あしをねだりますんでございますがね、暖あたい、ねんばりした雨も、その門附かどづつけの足と一緒に、向うへ寄つたり、こつちへよつたり、ゆるゆる歩行あるいて来ますようです。

その納豆納豆——というのだの、東京というのです、店前
 だの、小僧が門口かどぐちを掃はいている処ところだと申しますのが、何んだか
 懐なつかしい、両親の事や、生れました処なんぞ、昔が思い出されまし
 て、身体からだを煮られるような心持がして我慢が出来ないで、掻か巻まき
 の襟えりへ喰くいついて、しつかり胸を抱だいて、そして恍うつ惚とりとなつて
 おりますと、やがて、些ちと強く雨が来て当ります時、内うちの門かどへ参
 ったのでございます。

（ええ、ええ、ええ、）

と言いい出ですじやございませんか。

（お話はお馴染なじみの東京世渡草よわたりぐさ、商人あきんどの仮声物真似こわいろものまね。先ず神か
 田辺んだへんの事でござりまして、ええ、大家たいけの店さきでござります。

夜のしらしらあけに、小僧さんが門かどぐち口を掃いておりますと、納

豆納豆――

とだけ申して、

（ええ、お御酒みきを頂きまして声が続きません、助けて遣やっておくんなさい。）

と一分一厘ぶりんおなじことを、おなじ調子でいうんですもの。私の門かどへ来ましたまでに、遠くから丁ちようど十三度たび聞いたのでございます。
」

「女中が直ぐに出なかつたんです。」

（ねえ、助けておくんなさいな、お御酒^{みき}を頂いたもんだからね、
声が続かねえんで、えへ、えへ、）

厭^{いや}な咳^{せき}なんぞして、

（遣^やつておくんなさいよ、飲み過ぎて切^{せつ}ねえんで、助けておくん
なさい、お願^{ねげ}えだ。）

と言^{ひと}つて独^{ひとりごと}言^{こと}のように、貴^{あなた}下、

（遣^やり切^きねえや、）ツて、いけ太^{ふとぶと}々^{ようす}しい容^{ようす}子^すつたらないんです
もの。其^{そこ}処^こらへ、ベツベツ唾^{つば}をしっかけていそうですわ。

小^こ銭^{ぜに}の音をちやらちやらとさして、女中が出そうにしましたか
ら、

(光^{みつ}かい、光や、)

と呼んで、二階の上^{あが}り口へ来ましたのを、押留^{おしと}めるように、床^{とこ}の中から、

(何んだね、)

と自分でも些^ちと尖^{とげ}々しく言つたんです。

(門附^{かどづけ}でございます。)

(芸人^{げいにん}かい！)

(はい、)

ツて吃驚^{びっくり}していました。

(不可^{いけな}いよ、遣^やつちや不可^{いけ}ない。)

芸人なら芸人らしく芸をして銭^{おあし}をお取り、とそうお言い。出来

ないなら出来ないと言って乞食^{こじき}をおし。なぜまた自分の芸が出来ないほど酒を呑んだ、と言ってお遣り^や。いけ洒^{しや}亜^あ々々失礼じやないか。）

とむらむらとして、どうしたんですか、じりじり胸が煮え返るよう^きで極^きめつけますと、窃^{そつ}と跫^{あしおと}音を忍んで、光^{みつ}やは、二階を下りましたつけ。

^{はずか}お恥しゅうございますわ。

^{かんだか}甲高かつたそうで、よく下まで聞えたと見えます。表^{おもてにかい}一一階にいたんですから。

（何んだって、）

と門^{かどぐち}口で喰^くってかかるような声がありました。

枕をおさえて起おきありますと、女中の声で、御病氣なんだから

と、こそこそいうのが聞えました。

あざけ
嘲るように、

（病人なら病人らしく死んじまえ。治なおるもんなら治よつたら可よかるう。何んだって愚ぐ図ずついて、煩わづらっているんだ。）

と赭あから顔がおなのが白い齒むを剥むき出していうようです。はあ、そんな心持がしましたの。

（おお、死んで見せようか、死ぬのが何も、）とつつと立つと、ふらふらして床とこを放はなれて倒れました。段へ、裾すそを投げ出して、欄ら干かんにつかまった時、雨がさつと暗くなって、私はひとりで泣いたんです。それツきり、声も聞えなくなつて、門附かどづけは何処どこへ参り

ましたか。雨も上つて、また明い日あかるが当りました。何んですかね
 え、十文字こどもに小児ひつしよを引背負はだしつて跣足あるで歩行かつこうしている、四十恰好
 の、巖がんじよう乗な、絵かに描いた、赤鬼あかおにと言つた形のもののように、
 今こつちやつてお話をします内うちも考えられます。女中に聞いたので
 もございませんのに――

またもう寢床へ倒れツきりになりましたでしょうかとも存じましたけ
 れども、そうしたら氣でも違いそうですから、ぶらぶら日向ひなたへ出
 て来たんでございます。

否いいえ、はじめてお目にかかりました貴下あなたに、こんなお話を申上げ
 まして、もう氣が違つておりますのかも分りませんが、――

と言いかけて、心を籠こめて見詰めたらしい、目の色は美しかつ

た。

「貴下、真個に未来というものはありますものでございましよ

うか知ら。」

「……………」

「もしあるものと極りますなら、地獄でも極楽でも構いません。

逢いたい人が其処にいるんなら。さつさと其処へ行けば宜しいん

ですけれども、」

と土筆のたけの指白う、またうつなげに草を摘み、摘み、

「きつとそうと極りませんから、もしか、死んでそれつきりにな

つては情ないんですもの。そのくらいなら、生きていて思い悩ん

で、煩わらず、段々消えて行きます方が、いくらか増だと思いま

す。忘れないで、何時^{いつ}までも、何時^{いつ}までも、」

と言いいい抜き取った草の葉をキリキリと白歯^{しろは}で噛^かんだ。

トタンに慌^{あわ}ただしく、男の膝^{ひざ}越^こに衝^つとのぼした袖^{そで}の色も、帯の影

も、緑の中に濃くなつて、活^{いき}々^{いき}として蓮葉^{はすは}なものいい。

「いけないわ、人の悪い。」

散策子は答^{こた}えに窮^{きゆう}して、実は草の上に位置も構^なわず投出^{なげだ}された、

オリブ色の上表紙^{うわびょうし}に、とき色のリボンで封のある、ノオトブ

ックを、つまさぐっていたのを見たので。

三十三

「こつちへ下さいよ、厭いやですよ。」

と端はしへかけた手を手帳に控えて、麦むぎ 畠はたけへ真ま正しょう面めん。話を

わきへずらそうと、青せい天てん白はく日じつに身構えつつ、

「歌がお出来なさいましたか。」

「ほほほほ、」

と唯ただ笑う。

「絵をお描かきになるんですか。」

「ほほほほ。」

「結構ですな、お楽しみですね、些ちと拝見いたしたいもんです。」

手を放はなしたが、附くっ着ついた肩も退のけないで、

「お見せ申しましょうかね。」

あどけない状さまで笑いながら、持もち直なおしてばらばらと男の帯のあたりへ開く。手帳の枚頁ページは、この人の手にあたかも蝶つばきの翼を重ねたようであつたが、鉛筆で描かいたのは……

ひとめ
一目見て散策子は蒼あおくなつた。

大小濃薄のうはく乱雑に、半ばなかかきさしたのもあり、歪ゆがんだのもあり、震えたのもあり、やめたのもあるが、○と□△ばかり。まるしかんかく

「ね、上手じょうずでしょう。此処ここ等の人たちは、貴下あなた、玉脇たまわきでは、

絵を描かくと申しますとき。この土手へ出ちや、何時いつまでもこうしていますのに、唯ただいては、谷戸口やとぐちの番人のようでおかしゅうござんすから、いつかつからはじめたんですわ。

大層評判が宜よろしゅうございますから……何なんですよ、この頃に絵え

具のぐもちだを持出して、草の上で風流の店びらきをしようと思います、大した写生じゃありませんか。

この円まるいのが海、この三角が山、この四角しかくいのが田圃たんぼだと思えばそれでもようござんす。それから○まるい顔にして、□しかくい胴たねにしてさんさんかくかく△に坐まっている、今戸焼いまどやきの姉あねさん様だと思えばそれでも可ようございます、袴はかまを穿はいた殿様だと思えばそれでも可よいでしよう。

それから……水中に物あり、筆者に問えば知らずと答うと、高慢かおつきな顔色かおつきをしても可いいんですし、名を知らない死んだ人の戒かいみよ名うだと思おもつて拝おがんでも可いいんですよ。」

ようよう声が出て、
「戒かいみよう名、」

と口が利ける。

「何、何んというんです。」

「四角院円々 三角 居 土と、」

いいながら土手に胸をつけて、袖を草に、太脛のあたりま

で、友染を敷乱して、すらりと片足片棲を泳がせながら、

こう内へ掻込むようにして、鉛筆ですらすらとその三体の秘密

を記した。

テンテンカラ、テンカラと、耳許に太鼓の音。二人の外に人

のない世ではない。アノ椿の、燃え落ちるように、向うの茅屋へ、

続いてばたばたと溢れたと思うと、菜種の路を葉がくれに、真

黄色な花の上へ、ひらりと彩って出たものがある。

茅屋かややの軒にわとりへ、鶏まいあがが二羽舞上ったのかと思つた。

ふたつかしらの頭、獅子頭ししがしら、高いのと低いのと、後あとになり先になり、

もつあしも纏れる、狂う、花すれ、葉ずれ、菜種に、と見るとやがて、足

と許からそなたへ続く青麦の畠はたけの端、玉脇の門の前へ、出て来た

連獅子れんじし。

汚れた萌黄もえぎの裁着たっつけに、泥草鞋どろわらじの乾いた埃ほこりも、霞かすみが麦にかか

るよう、志こころざしして何処どこへ行く。早はやその太鼓うちやを打留めて、急いそぎあし足に

近づいた。いずれも獅子の角兵衛かくべえ大だい小しょう。小さい方は八ツば

かり、上は十三―四と見えたと、すぐに久能谷くのやの出口つっきを突切り、

紅白ぼたんの牡丹おもかげの花、はつと倅おもかげに立つばかり、ひらりと前ゆを行き過ぎ

る。

「お待ちちよいと、」

と声をかけた美女たおやめは起直おきなった。今の姿をそのままに、雪駄せつた

は獅子の蝶に飛ばして、土手の草に横坐よこずわりになる。

ト獅子は紅くれないの切きを捌さばいて、二つとも、立たって頭かしらを向けた。

「ああ、あの、児こたち、お待ちなね。」

テンテンテン、（大きい方が）トンと当てると、太鼓おの面おもに撥ばちが飛んで、ぶるぶると細こまかに躍おどる。

「アリヤ」

小獅子は路みちへ橋はしに反そった、のけ様の頤さまあぎとふつくりと、二ふたかわ目めに紅こうちようを潮くちもとして、口許くちもとの可愛かわいらしい、色の白こい児こであつた。

三十四

「おほほほ、大層勉強するわねえ、まあ、お待ちよ。あれさ、そんなに苦しい思いをして引くりかえらなくつても可いんだよ、可いんだよ。」

とおさ圧えつけるようにいうと、ぴよいと立直たちなおつて頭の堆かしろずたかく大きく突出つきでた、紅くれないの花の廂ひさしの下に、くるツとした目を睜みはつて立つた。ブルブルツと、跡あとを引いて太鼓が止やむ。

美女たおやめは膝をずらしながら、帯に手をかけて、揺ゆり上げたが、

「お待ちよ、今お錢あしを上あげるからね、」

手帳の紙へはしり書がきして、一枚手許てもとへ引切ひききつた、そのまま獅子

をさし招いて、

「おいでおいで、ああ、お前ね、これを持って、その角の二階家^{かど}へ行つて取つておいで。」

留守へ言いつけた為替^{かわせ}と見える。

後馳^{おくれば}せに散策子は袂^{たもと}へ手を突込^{つきこ}んで、

「細^{こまか}いのならありますよ。」

「否^{いいえ}、可^ようござんすよ、さあ、兄^{あに}や、行つて来な。」

撥^{ばち}を片手^{ひっ}で引つかむと、恐る恐る差出^{さしだ}した手を素疾^{すばや}く引込^{ひっこ}め、

とさかをはらりと振つて行く。

「さあ、お前こつちへおいで、」

小さな方を膝^{ひざもと}許^{もと}へ。

きよとんとして、ものも言わず、棒を呑んだ人形のような顔を、
凝^{じつ}と見て、

「幾^{いくつ}歳^{さい}なの、」

「八^や歳^っでござえス。」

「母^{おっか}さんはないの、」

「角兵衛に、そんなものがあるもんか。」

「お前は知らないでもね、母^{おっかさん}様^{さん}の方は知^しつて^つるかも知^しれない

よ、」

と衝^つと手を袴^{はかま}越^{ごし}に白くかける、とぐいと引^ひ寄^きせて、横抱^{よこだ}き

に抱くと、獅^し子^{しがしら}頭^{あたま}はばくりと仰^あ向^{おもむ}けに地を払^はつて、草鞋^{わらんじ}は高

く反^そつた。鶏^{とり}の羽^はの飾^{かざり}には、椰^{やし}子の葉を吹く風が渡る。

「あなた
貴下、」

と落着いて見返つて、

「私の兎こかも知れないんですよ。」

トタンに、つるりと腕かいなすべを這つて、獅子は、倒さかにトンと返つて、

ぶるぶると身体からだをふつたが、けろりとして突立つったつた。

「えへへへへへ、」

此処ここいきおいへ勢よく兄獅子が引返ひきかえして、

「頂いただきいたい、頂いただきいたい。」

二つばかり天窓あたまを掉ふつたが、小さい方の背中を突いて、テンと

また撥はちを当てる。

「可いいよ、そんなことをしなくつても、」

と裳もすそをずりおろすようにして止とめた顔と、まだ掴つかんだままの大
な銀貨とを互たがいに見較みくらべ、二個ふたりともとぼんとする。時に朱盆しゅぼんの口
を開いて、眼まなこを輝かがやすものは何。

「そのかわり、ことづけたいものがあるんだよ、待つておくれ。」
とその○□△を楽書らくがきの余白へ、鉛筆を真直まっすぐに取つてすらす
らと春の水の靡なびくさまに走らした仮名かなは、かくれもなく、散策子
に読得よみえられた。

君とまたみるめおひせば四方よもの海うみの

水の底をもかつき見てまし

散策子は思わず海の方かたを屹きつと見た。波は平たいらかである。青麦につ

づく紺こんじょう青の、水平線上雪ゆき一山。

富士の影が渚を打つて、ひたひたと薄く被さる、藍色の西洋館の棟高く、二、三羽鳩が羽をのして、ゆるく手巾を掉り動かす状であつた。

小さく畳んで、幼い方の手にその（ことづけ）を渡すと、ふツくりした頤で、合点々々をすると見えたが、いきなり二階家の方へ行こうとした。

使を頼まれたと思つたらしい。

「おい、そつちへ行くんじゃない。」

と立入つたが声を懸けた。

美女は莞爾して、

「唯持つて行つてくれれば可いの、何処へツて当はないの。落し

たら其処そこでよし、失くしたらそれツきりで可いいんだから……唯心ただこころ

持もちだけなんだから……」

「じゃ、唯持ただつて行きや可いいのかね、奥さん、」

と聞いて頷うなずくのを見て、年紀上としうえだけに心得こころえ顔で、危あぶなつかしそ

うに仰向あおむいて吃驚びつくりした風ふうでいる幼い方の、獅子頭ししがしらを背後うしろへ引

いて、

「こん中へ入れとくだア、奴やつこ、大事にして持ツとんねえよ。」

獅子が並んでお辞儀じぎをすると、すたすたと駈け出した。後白あとしら

浪なみに海の方かた、紅の母衣かたくれ翩翻へんぽんとして、青麦の根に霞かすみ行ゆく。

さて半時ばかりの後、散策子の姿は、一人、彼処かしこから鳩の舞うのを見た、浜辺の藍色あいいろの西洋館の傍かたわらなる、砂山の上に顕あらわれた。
 其処そこへ来ると、浪打際なみうちぎわまでも行ゆかないで、太く草臥いたくたびれた状さまで、ぐツたりと先ず足を投げて腰を卸おろす。どれ、貴女あなたのために（ことづけ）の行方ゆくえを見届けましょう。連獅子れんじしのあとを追って、というのをしおに、まだ我わが儘ままが言い足りず、話相手の欲しかったらしい美女びじよに辞たまして、袂たもとを分つたが、獅子の飛ぶのに足の続くわけはない。

一先ひとまず帰宅して寝転ぼうと思つたのであるが、久能谷くのやを離れて街道を見ると、人の瀬を造つて、停車場ステイションへ押懸おしかける夥おびただしさ。中

にはもう此処等から仮声をつかつて行く壮伎がある、浅黄の襦袢を膚脱で行く女房がある、その演劇の恐しさ。大江山の段か何か知らず、とても町へは寄附かれたものではない。

で、路と一緒に、人通の横を切つて、田圃を抜けて来たのである。

正面にくぎり正しい、雪白な霞を召した山の女王のましますばかり。見渡す限り海の色。浜に引上げた船や、畚や、馬秣のように散ばったはじめの如き、いずれも海に対して、我は顔をすゐるのではないから、固より馴れた目を遮りはせぬ。

かつ人一人いなければ、真昼の様な月夜とも想われよう。長閑さはしかし野にも山にも増つて、あらゆる白砂の俤は、暖い霧に

似ている。

鳩は蒼空あおぞらを舞うのである。ゆったりした浪なみにも誘さそわれず、風

にも乗らず、同一処おなじところを——その友は館やかたの中に、ことごとと峙ねぐらを

踏んで、くくと啼なく。

人はこういう処ところに、こうしていても、胸の雲霧くもぎりの霽はれぬ事は、

寐ねられぬ衾ふすまと相違そういはない。

徒らいたずに砂を握れば、くぼみもせず、高くもならず、他愛たわいなくほ

ろほろと崩れると、また傍かたわらからり添える。水を掴つかむようなもの

で、搜さがればはらはらとただ貝が出る。

渚なぎさには敷満しきみちたが、何んにも見えない処ところでも、纔わずかに砂を分けれ

ば貝がある。まだこの他に、何が住んでいようも知れぬ。手の届

く近い処がそうである。

水の底を捜したら、渠がためにこがれ死をしたと言う、久能谷の庵室の客も、其処に健在であろうも知れぬ。

否、健在ならばという心で、君とそのみるめおひせば四方の海の、水の底へも潜ろうと、（ことづけ）をしたのであろう。

この歌は、平安朝に艶名一世を圧した、田かりける童に襖をかりて、あをかりしより思ひそめてき、とあこがれた情に感じて、奥へと言ひて呼び入れけるとなむ……名媛の作と思う。

言うまでもないが、手帳にこれをしるした人は、御堂の柱に、うたた寐の歌を楽書したとおなじ玉脇の妻、みを子である。

深く考うるまでもなく、庵の客と玉脇の妻との間には、不可思

議の感応で、夢の契ちぎりがあつたらしい。

男は真ま先さきに世間外せけんがいに、はた世間のあるのを知つて、空想をして実現せしめんがために、身を以もつて直ただちに幽冥ゆうめいに趣おもむいたものようであるが、婦人おんなはまだ半信半疑でいるのは、それとなく胸中の鬱悶うつもんを漏もらした、未来があるものと定さだまり、靈魂ゆくすえの行末が極きまつたら、直ぐにあとを追おうと言つた、言の端にも顯あらわれてい

た。
唯ただその有耶無耶うやむやであるために、男のあとを追ひもならず、生いき長ながらえる効かいもないので。

そぞろに門附かどづけを怪しんで、冥土めいどの使つかいのように感じた如きは幾分か心が乱れている。意氣張いきばりずくで死んで見せように到つては、益ま

すますのうらん
々 悩乱のほどが思い遣られる。

また一面から見れば、門附が談話の中に、神田辺の店で、江戸紫の夜あけがた、小僧が門を掃いている、納豆の声がした……のは、その人が生涯の東雲頃であつたかも知れぬ。——やがて暴風雨となつたが——

とにかく、（ことづけ）はどうなろう。玉脇の妻は、以て未来の有無を占おうとしたらしかつたに——頭陀袋にも納めず、帯にもつけず、袂にも入れず、角兵衛がその獅子頭の中に、封じて去つたのも氣懸りになる。為替してきらめくものを掴ませて、のツツ反ツツの苦患を見せない、上花主のために、商売冥利、随一大切な処へ、偶然受取つて行つたのであろうけれども。

あれがもし、鳥にでも攫さらわれたら、思う人は虚空こくうにあり、と信じて、夫人は羽化うかして飛ぶであろうか。いやいや羊が食うまでも、角兵衛は再び引返ひきかえしてその音信おとづれは伝えまい。

従つて砂を崩せば、従つて手にたまつた、色々の貝殻にフト目を留とめて、

君とまたみる目おひせば四方よもの海うみの……

と我にもあらず口ずさんだ。

更に答えぬ。

もしまたうつせ貝がいが、大いなる水の心を語り得るなら、渚に敷いた、いささ貝がいの花吹雪は、いつも私語ささやきを絶えせぬだろうに。
されば幼児おさなごが拾つても、われらが砂から掘り出しても、このも

のいわぬは同一おなじである。

小貝こがいをそこで捨てた。

そうして横ぎまに砂に倒れた。腰の下はすぐになだれたけれども、すべにり落ちてうもも埋れはせぬ。

しばらくして、その半眼はんがんに閉じた目は、斜めに鳴鶴なきつるヶ岬さきま

で線を引いて、その半ばと思う点へ、ひらひらと燃え立つような、不知火しらぬいにはつきり覚めた。

とそれは獅子頭ししがしらの緋ひの母衣ほろであつた。

二人とも出て来た。浜は鳴鶴ヶ岬から、小坪こつぼの岨がけまで、人影一

ツ見えぬ処ところへ。

ステイションしばいに演劇がある、町も村も引つぷるつて誰たれが角兵衛とに取

合りあおう。あわれ人の中のぼうふらのような忙せわしい稼業この児たち、
今日はおのずから閑かんなのである。

二人は此処ここでも後あとになり先になり、脚絆きやはんの足を入れ違いに、
頭かしらを組んで白波しらなみを被かつぐばかり浪打際なみうちぎわを歩行あるいたが、やがてそ
の大きい方は、五、六尺渚なぎさはなを放れて、日影の如く散乱ちりみだれた、か
じめの中へ、草鞋わらじを突出つきだして休んだ。

小獅子は一層活潑かつぱつに、衝つと浪を追う、颯さつと追われる。その光
景、ひとえに人の児この戯たわむれるようには見え、かつて孤児院の児
が此処ここに来て、一種の監督の下に、遊んだのを見たが、それとひ
とつで、浮世の浪に揉もみ立てられるかといじらしい。但ただその頭かしらの
獅子が怒り狂って、たけり戦いきおいう勢である。

勝かつでは可よい！

ト草鞋わらじを脱いで、跣足はだしになつて横歩行よこあるきをしはじめた。あしを

濡らして遊んでいる。

大きい方は仰向けあおもむに母衣ほろを敷いて、膝を小さな山形に寝た。

磯いそを横ツ飛とびの時は、その草鞋わらじを脱いだばかりであつたが、やが

て脚絆きやはんを取つて、膝まで入つて、静かに立つていたと思うと、

引返ひきかえして袴はかまを脱いで、今度は衣類きものをまくつて腰までつかつて、

二、三度密そつと潮しほをはねたが、またちよこちよこと取つて返して、

頭かしらはねのを刎退きものけ、衣類きものを脱いで、丸裸になつて一文字に飛込とびこんだ。陽

気はそれでも可よかつたが、泳ぎは知らぬ児こと見える。唯勢たきおいよく、

水を逆に刎返はした。手でなぐつて、足で踏むを、海水は稲妻いなずま

のように幼児おさなごを包んでその左右へ飛んだ。——しずく雫ばかりの音も
 せず——獅子はひとえに嬰兒みどりごになった、白光びやくこうは頭かしらを撫なで、
りよくは緑波は胸いだを抱いた。何らの寵児ちようじぞ、天地あめつちの大きな盥たらで産湯うぶゆ
 を浴あびるよ。

散策子はむくと起きて、ひそかにその幸福を祝するのであった。
 あとで聞くと、小児心こどもごころにもあまりの嬉うれしさに、この一幅いっぷくの
 春の海に對して、報恩ほうおんの志こころざしであつたという。一旦いったん出て、浜へ
 上つて、寝た獅子の肩の処ところへしやがんでいたが、對手あいてが起返おきかえる
 と、濡れた身体からだに、頭かしらだけ取つて獅子を被かいだ。

それから更に水に入つた。些ちと出過ですぎたと思うほど、分けられた
 波の脚あしは、二線ふたすじ長く広く尾を引いて、小獅子の姿は伊豆いずの岬に、

ちよと小さな点になつた。

浜にあぐらいるのが胡坐あぐらかいたと思うと、テン、テン、テンテンツツ
テンテンテン波にちよううちこ丁と打込む太鼓、油のような海うなづら面へ、綾あやを流
して、響くと同時に、水の中に立つたのが、一曲、頭かしらを倒かさに。

これに眩めくらめいたものであろう、啊あ呀ないま忌まわし、よみじの（ことづ
け）を籠こめたる獅子を、と見る内に、幼兒おさなごは見えなくなつた。

まだ浮ばぬ。

太鼓が止やんで、浜なるは棒立ちになつた。

砂山あわただを慌あしく一文字に駈ちかづけて、こなたが近ちかづいた時、どうしたの

か、脱はぎ捨てた袴はかま、着物、脚絆きやはん、海草からの乾さまびた状さまの、あらゆる
記念かたみと一緒に、太鼓も泥草鞋どろわらじも一ひとまとめに引ひかかえて、大きな

渠は、砂煙すなけむりを上げて町の方かたへ一散いっさんに遁にげたのである。

浪なみはのたりと打つ。

ハヤ二、三人駈けて来たが、いずれも高たか声こえの大笑い、

「馬鹿な奴だ。」

「馬鹿野郎。」

ポクポクと来た巡查に、散策子さんさくこが、縋すがりつくようにして、一ひとこ

言こというと、

「角兵衛が、ははは、そうじゃそうで。」

死骸しかいはその日終ひねもす日見当ひねもすらなかつたが、翌日しらしらあけの引ひ

潮しほに、去年の夏、庵室あんじつの客が溺れたとおなじ鳴鶴なきつるヶ岬さきの岩

に上あがった時は二人であつた。顔が玉たまのような乳房ちぶさにくツついて、

緋母衣ひほろがびつしより、その雪の腕かいなにからんで、一人は美びにして艶えんであつた。玉脇の妻は靈魂れいこんの行方ゆくえが分つたのであろう。

さらば、といつて、土手の下で、分れ際ぎわに、やや遠ざかつて、

見返つた時——その紫の深張ふかばりを帯のあたりで横にして、少し打

ちかたむ

傾かたむいて、黒髪くろかみの頭かしらおもげに見送つていた姿を忘れぬ。どん

なに潮うしおに乱れたろう。渚なぎさの砂は、崩しても、積る、くぼめば、た

まる、音もせぬ。ただ美しい骨が出る。貝の色は、日の紅くれなゐ、渚の

雪なみ、浪の緑。

青空文庫情報

底本：「春昼・春昼後刻」岩波文庫

1987（昭和62）年4月16日第1刷発行

1999（平成11）年7月5日第19刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十卷」岩波書店

1940（昭和15）年5月

初出：「新小説」

1906（明治39）年12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※章番号は「春昼」から連続しています。

入力：小林繁雄

校正：平野彩子、土屋隆

2006年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春昼後刻

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>